

千葉薬品社長賞

あらい かずえ
新井 一江

「まだ見ぬ父へ」

新井 一江

私の父は、昭和19年10月26日戦地に向かう船に乗船中、
アメリカの潜水艦に爆撃され、29歳の若さで戦死しました。

私は19年2月生まれで、生まれてすぐ父が出征したので父の顔を知りません。
母が再婚をしたので、家には写真もなく、子供の頃は義理の父がいたので
父の事を思う事ありませんでした。

63歳の時、戦没者の遺児の慰霊の旅があることを知り、参加しフィリピンに
行って来ました。

沢山の遺児と出会い、戦争の悲惨さ悲しさを改めて感じる旅でした。

戦争がなければ、遊んだり、勉強を教えて貰ったり、普通の暮らしがあった事でしょう。

「お父さんと呼んでみたかった」

一緒に旅にも行きたかった。

孫を抱かせてあげたかった。

今度生まれ変わったら、戦争のない時代に生まれたいです。

お墓には骨はありません、名前だけ刻まれています。

私が死んだら、バシー海峡の海の底に沈んでいるお父さんに会うため、

南の海に遺骨をまいてくれるよう息子に頼んであります。

私も74歳になりました。

もう少し待っててね。

(千葉県/74歳/女性/無職)

顔も知らない父の事を想い、一気に書きました。